

おおくまの室

vol.3 2021.4.1



Pickup *New Generation*

1～2	高木慎也	「イタリア食材と福島食材を大熊でつなげたい！」
3～4	佐藤真喜子	「大熊町に『食べて眠れる』芸術文化のエリアをつくる！」
5～6	関本元樹	「もう一度ふるさとの味を作りたい！」
7～8	梶原慶希	「子供達に空手道を教えたい！」
9～10	梨本智	「子供たちが笑顔で集まる場をつくりたい！」

TAKE
FREE

Pickup!

イタリア食材と福島食材を大熊でつなげたい！



高木慎也

Takagi Shinya

ピッツァ職人/
直輸入イタリア食材店
(日本橋三越店)

町区

震災があって、もう10年になります。色々考える毎日が続きましたが、ようやく自分の中で整理がつき始めてきました。地元を離れてから募る思いが日に日に強くなってきています。今の自分に何か出来る事はないのか？地元の復興にはどうしたらいいのか？と考えながら仕事をしています。これから少しでも力になれる事を探し、行動していきたいと思っています。

今の会社では人材育成やピッツァ教室の講師、メニュー開発等をしています。イタリア食材のテーマパークの様な場所で毎日ピッツァを焼いています。





大熊町でやってみたいこと！

イタリア店をやりたいです！

イタリア食材と福島食材のミックス料理

自分がイタリアや、東京で15年勉強してきたピッツァを地元の人達や大熊町に関わる方に食べて頂きたいです。

それと、イタリアの Pasta やコーヒー、ジェラート等食べてもらいたいです。

食べる事の喜びや感動を、食を通して発信するのが大熊町でやってみたいことです！



Pickup!

大熊町に「食べて眠れる」芸術文化の

エリアをつくる!



佐藤真喜子

Sato Makiko

野上2区

舞台芸術人

野上の地で自由気ままに育ちました。大熊町の豊かな自然が好きです。

東日本大震災のあと精神的に落ち込んでいたときに、舞台芸術にとっても助けられました。それがきっかけで大学でも演劇を主とした舞台芸術を専攻してしまったほどです。

卒業後も関東近辺でゆるりと舞台の活動を続けていこうと考えていましたが、新型コロナウイルスの世界的な流行の中でまさきに「劇場」が規制されたことを受け、大学4年にして「いよいよ職に就かなければいけない」と考えるようになりました。自分の中でずっと興味のあることのひとつにふるさと大熊町があったことと、これまでのさまざまなご縁がつながりふたたび大熊町で生活し働いています。

大熊町でやってみたいこと!

舞台芸術がもつ「同じ目的をもった人々が、同じ時間と空間を共有している」という特性に注目していて、大熊町でもそうした「場」をつくっていききたいと思案中です。震災後の混乱の中、大熊町出身という共通点を持つ人々が集まる「場」で安心を得た経験があるからこそ、こうした考えを持つようになったのかなあと思っています。



かまどキッチン/静物たち(躍動編)

夢はでっかく、「食べて眠れる」芸術文化のエリアを大熊町につくっていくこと!そして、大熊町の文化水準向上に携わっていくことです。



かまどキッチン/『進行する風景/変型する憧憬』

小さいころ、芸術に興味はあるものの大熊町内でそれを手に取るにはあまりにも選択肢が限られていることをある種のコンプレックスに感じていました。東京にはいろいろな選択肢があって、芸術文化の環境がもう整っているのに、わたしは自由に東京に行くことすらままならない子どもで、成長したとてこの町から東京に行き芸術を体感するにはとにかくお金がかかる。その事実がわたしにとってはつらかったのです。



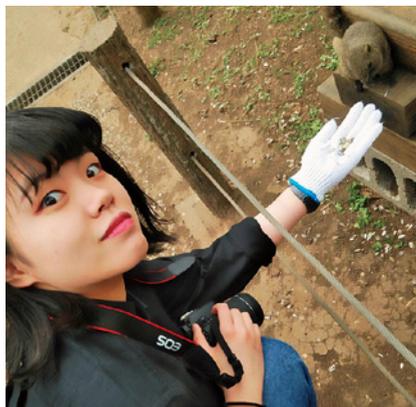
そんなことを思いつつ、自分が大学進学をしてまで舞台芸術について学ぶとは想像もしていませんでした。精神的に落ち込んでいたときに唯一興味を持てたことが舞台芸術だったこと、それまで出会った人々とのご縁によって大学進学を決めました。わたしはご縁に支えられることが多いのです。

せっかくなので、大学で得た学びや出会いを、わたしにできる形でふるさと大熊町に還元していきたいと考えています。

大学では舞台芸術について広く学んでいたのでも舞台への出演経験もあるのですが、スタッフとして縁の下の力持ち的に舞台を支えていた時間もとても充実していました。大熊町に関わることも続けていきますが、舞台芸術へも関わり続けます。

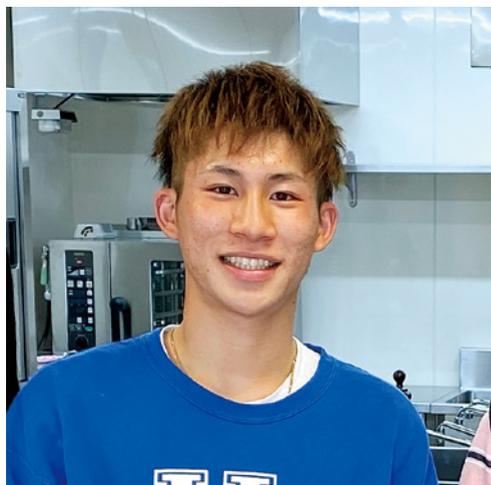
舞台芸術といっても、関わり方はさまざまあると思います。舞台をつくる人になることはもちろん、客席でそれを体感することも舞台への関わりのひとつなのだと考えます。舞台はつくる側と客席との間に確かな信頼関係があってこそ成り立つわけですが、そうした特性もこの町に活かせるのではないかと思うのです。

わたしの中では、舞台に関わっている自分と大熊町で働いている自分とはそこまでかけ離れていません。今後も自分のやりたいことを実現させていきたいです。



Pickup!

もう一度ふるさとの味を作りたい！



関本元樹

Sekimoto Genki

下野上三区

梨農家

2000年生まれ。震災後は千葉県に移住し、現在は京都で学生生活を送っています。全国を旅することが好きで、そこで美味しいものを食べるのが1番幸せです！卒業後は、大熊町にいた時から続く実家の「フルーツガーデン関本」を継ぐ予定です。





大熊町でやってみたいこと！

大熊町の特産物である梨・キウイフルーツの復活。全国の人に安心して食べていただける品質ともう一度食べたくなるような味を追求したいです。また、全国各地に避難した町民にも懐かしく思ってもらえるように、ふるさとの味を届けたいです。また町に足を運びたくなるきっかけにもなればよいと思います。



子供達に空手道を教えたい！



梶原慶希

Kajiwara Yoshiki

熊1区

広野町みかんクラブ
少年空手道部
指導者

1997年

大熊町空手道スポーツ少年団 入団
空手道歴 23年

東日本大震災から3年経った頃に、復興に向け頑張っている広野町の友人から「広野町の空手道部を再開するから、一緒にやらないか」と、誘いを受けました。それから約7年間、広野町で空手道の指導を行っています。

私が空手道をはじめたきっかけは、親の勧めで大熊町空手道スポーツ少年団に入団したことです。共に切磋琢磨し、ライバルであった友人、面倒見がよく憧れであった先輩方と、仲間にも恵まれていました。

また、恩師との出会いが、後に指導者を目指すきっかけとなりました。

大熊町の空手道では、「心技一体」を基礎に、稽古をしてきました。

とくに「心」について学んだことは、人生においても糧になっています。

子供達が、「空手道」を通し、試合の勝ち負けだけでなく、人生において何か一つでも「生きる力」=糧になるものを見出せるような、手伝いができればと思っています。

また、空手道を通してよかったことは、県内外にたくさんの友人ができたことです。空手道だけでなく、子供達にはスポーツを通して町外、県外、更には国を超えて友達をつくってもらいたいです。スポーツを通して築いた友情は、特別なものを感じております。今、自分が空手道に携われているのも、空手道で繋がった友のおかげです。

たくさんの「おかげ」で今の自分があります。

その中でも「大熊町空手道スポーツ少年団」の存在は大きいものです。

最後に、このような素敵な企画に参加できたのも、道場の先輩が紹介して下さったおかげです。ありがとうございました。

空手道を通して「学んだこと」、「たくさんの出会い」はわたしの宝です。



大熊町でやってみたいこと！

ぜひ、子供達に空手道を教えたいです。
震災前一緒に練習していた方々に、会えるのも楽しんでいます。
また、みんなで稽古や、鏡開き等の行事を楽しみたいです。



Pickup!

子供たちが笑顔で集まる場をつくりたい！



梨本智

Nashimoto Satoshi

野馬形区

都重機土木有限会社
常務取締役

1986年生まれ 34歳

いわき市の高校へ進学。
浜高等技術専門学校を卒業後、
建築関係の仕事へ就く。

震災直前に地元へ戻り
都重機土木有限会社の
社員として就職。

現在、常務取締役を務める。



私は、大熊町野馬形地区出身で生まれてからずっと大熊町で過ごしてきました。今は地元の復興事業に携わっています。懐かしい場所や友人の家を見て思い出に浸っています。

ふるさとのために何かしたいという気持ちで商工会青年部に所属して、唯一の楽しみである「ふるさと祭り」に企画運営などに協力し活動しています。また、消防団の一員としての活動にも励んでいます。

震災前は海が近いこともありマリンスポーツをしてましたが、震災後は釣りやBBQを趣味としています。



大熊町でやってみたいこと！

ばらばらになった友人たちと一緒に、昔やった鬼ごっこや、熊川を水中横断したり、笑って集まって朝まで語らう場と時間をつくりたい。

いつか、子供たちに自分が生まれ育った町を紹介しながら、一緒に散歩がしたい。大熊町で子供たちが笑顔で集まる場をつくりたい。

大熊町にはいいものがたくさん。
自然、歴史、震災から立ち直ろうとする力・・・

その中でも一番すごいものってやっぱり大熊町の『人』。
「大熊町でこんなことやりたい！」
「こんな町になってほしい！」
「大熊町でこんな風に過ごしてみたい！」
そんなことを考えられる力。

大熊町の宝は人。
この本は、ほんの一部ですが大熊町の宝物を紹介しています。
まだまだ、第三弾です。

繋がることで強固に、認め合うことで高まる。
そんなきっかけを、この本でつくりたい。

この本が、これからの大熊町に良いきっかけをつくってくれることを願って。

福島県大熊町は、フルーツの香り漂うロマンの里！大熊町は、自然豊かな住み良い町です。梨やキウイ、鮭が町の名産品でした。

2011年3月、福島第一原子力発電所の事故による影響で町全域に避難指示が出されました。町内には、福島第一原子力発電所が立地しています。

避難生活が長期に渡ったことから、大熊町民は全国各地にバラバラに暮らしています。震災から8年が経過した2019年4月10日、町の一部地域で避難指示が解除されました。

現在、町での暮らしを再開した町民は約2%。

だけど、全国各地で大熊町に想いを寄せている人がたくさんたくさん、いるのです。